

桃太郎

むかしむかし、川上から大きな桃がどんぶらここと流れてきました。洗濯をしていたおばあさんは、その桃を家に持ち帰り、おじいさんと分けようと思いました。ところが桃を割ると、中から元気な男の子が飛び出してきました。二人は大喜びでその子を桃太郎と名づけ、大切に育てました。やがて桃太郎は、村を荒らす鬼を退治するため旅に出ます。道中で犬、猿、きじと出会い、きびだんごを分け与えて仲間になりました。力を合わせて鬼ヶ島に乗り込み、見事鬼を退治した桃太郎は、宝物を持って村へ帰り、みんなを幸せにしました。

浦島太郎

むかし、浦島太郎という心やさしい若者がいました。ある日、子どもたちにいじめられている亀を助けてあげました。すると数日後、その亀が現れ、海の底の竜宮城へ案内してくれました。そこでは美しい乙姫が出迎え、浦島太郎は夢のような日々を過ごします。しかし村のことが気になり、帰ることにしました。別れ際、乙姫から玉手箱を渡され、「決して開けてはいけません」と言われます。地上に戻ると、村の様子はすっかり変わり、知っている人は誰もいませんでした。驚いた浦島太郎が玉手箱を開けると、白い煙が立ちのぼり、たちまち老人になってしまいました。

さるかに合戦

むかし、正直なかにと、ずる賢いさるがいました。ある日、さるはかにに「この柿の種と、おにぎりを交換しよう」と持ちかけます。かにには承知し、種を植えて大切に育てました。やがて柿は立派に実りますが、木に登れないかにには取ることができません。そこへさるが現れ、熟していない柿を投げつけ、かにを傷つけてしまいました。怒ったかにの仲間たちは、臼や栗、蜂と力を合わせ、さるに仕返しをします。最後にさるは自分の過ちを認め、深く反省しました。この話は、ずるをすると必ず報いがあることを教えています。

アリとキリギリス

夏の間、アリたちは汗を流して食べ物を集めていました。一方キリギリスは、バイオリンを弾きながら歌ってばかりで、働こうとしません。アリは何度も「冬に困るよ」と忠告しますが、キリギリスは聞きませんでした。やがて冬が訪れ、雪が降り積もると、キリギリスは食べ物がなく困り果てます。アリの家を訪ねると、アリたちは冬に備えて十分な食料を蓄えていました。キリギリスは自分の怠けを恥じ、これからは働くことの大切さを学びました。このお話は、将来に備えることの重要性を静かに伝えています。

北風と太陽

北風と太陽が、どちらの力が強いと言い争っていました。そこへ一人の旅人が現れ、上着をしっかりと着ています。北風は勢いよく吹きつけ、上着を脱がせようとしたが、旅人は寒さに耐えてさらに上着を押さえました。次に太陽が、やさしく暖かな光を注ぎます。すると旅人は汗をかき、自然と上着を脱ぎました。これを見て北風は、自分のやり方が間違っていたことに気づきます。力づくよりも、思いやりや穏やかさの方が人の心を動かすことを、この話は教えてくれます。

醜いアヒルの子

ある農場で生まれたアヒルの子は、他の子と違って大きく、見た目も冴えませんでした。そのため仲間や周囲から笑われ、ひとりぼっちで過ごします。つらさに耐えきれず旅に出たアヒルの子は、寒い冬を必死に生き延びました。春になり湖に映った自分の姿を見ると、そこには美しい白鳥がいました。実はその子は白鳥だったのです。長い苦しみを経て、本来の自分に出会えたアヒルの子は、堂々と空を羽ばたきました。この物語は、自分の価値はすぐには分からないことを教えてくれます。

赤ずきん

赤いずきんをかぶった女の子は、おばあさんの家へお見舞いに行く途中でした。森の中で出会ったおおかみは、やさしいふりをして道を聞き出します。おおかみは先回りしておばあさんを食べ、赤ずきんを待ち構えました。違和感を覚えつつも近づいた赤ずきんは、ついにおおかみに食べられてしまいます。しかし、通りかかった狩人が気づき、おおかみのお腹から二人を助け出しました。赤ずきんは人を簡単に信じないことの大切さを学び、無事に家へ帰りました。

マッチ売りの少女

寒い大晦日の夜、裸足の少女がマッチを売り歩いていました。誰も買ってくれず、帰る家也没有せん。凍えながらマッチを一本擦ると、暖かいストーブやごちそう、優しいおばあさんの幻が見えました。少女は次々とマッチを擦り、幸せな光景に包まれます。やがて朝になると、少女は静かに雪の中で眠っていました。人々は気づきませんでした。少女の心は温かい夢に満ちていました。この物語は、弱い立場の人への思いやりを私たちに問いかけます。

鶴の恩返し

むかし、貧しい男が罾にかかった鶴を助けてあげました。数日後、その男の家に美しい女性が訪れ、妻となります。彼女は機織りをして立派な布を織り、「決して中をのぞかないでください」と言いました。男は約束を破り、こっそり中をのぞいてしまいます。そこには、自分の羽を抜いて布を織る鶴の姿がありました。正体を知られた鶴は、悲しそうに空へ飛び立ちます。男は深く後悔しましたが、鶴の優しさは心に残り続けました。

親指姫

花の中から生まれた親指ほどの小さな女の子は、親指姫と名づけられました。ある夜、がまがえるにさらわれ、望まぬ結婚を迫られますが、親切な魚やつばめに助けられます。長い旅の末、花の国にたどり着いた親指姫は、自分と同じ大きさの王子と出会いました。二人は心を通わせ、幸せに暮らします。親指姫は、自分の居場所を探し続けた末に、本当に安心できる世界を見つけたのです。